

研究協力に関するお願い

テーマ：発達性ディスレクシア児者の音読速度に影響する要因

NPO 法人 LD・Dyslexia センター

目白大学保健医療学部言語聴覚学科 教授

春原 則子

1. 研究の背景と目的

発達性ディスレクシアは学習障害の中核障害と考えられており、その特徴は正確、かつ、または、流暢な音読の困難さと書字の困難さにある。日本語話者の出現率について宇野ら（2009）は、読み書き障害と書字のみの障害例を合わせて約 8%と報告しています。文字と音との関係が規則的な言語においては、音読の正確性は比較的獲得されやすいとされていますが、流暢な読み、における困難さは残存しやすいと考えられています（Barca, et al., 2006; Marinelli, et al.2008; Wydell&Butterworth, 1999）。たとえば、イタリア語圏での研究では、読み困難におけるリスク児はリスクのない子どもに比べて、学童期初期から音読速度の発達が良好ではないという報告（Speece&Ritchy, 2005）や、正確な音読が可能になっても音読速度は遅い場合があり、それは学年が上がっても持続するという報告（Tressoldi, et al., 2001）がなされています。日本語のひらがなとカタカナも、特殊音節を除けば文字－モーラ対応が規則的であり、音読の正確さにおける問題は比較的小さく、主となる症状は読みの遅さにある可能性が考えられます。音読における流暢性とは、文字から音への変換における効率と考えることができますが、その評価には音読所要時間が多く用いられています。春原ら（2011）は、日本語話者の典型発達児については、単語の音読速度は小学 3 年生までにほぼ発達すること、非語や文章はそれよりもゆっくと発達すること、また、音読速度に関わる要素的な認知機能としては、自動化能力と音韻認識力が関わりと報告しました。しかし、本邦において、発達性ディスレクシア児における音読速度の発達、発達性ディスレクシア児の音読速度に関わる要素的な認知機能は明らかとなっていない。そこで今回、この 2 点を明らかにすることを目的として調査を行うことといたしました。

調査についてご理解の上データの使用をご許可いただけますようお願いいたします。

2. 方法

読み書きの困難さを主訴として NPO 法人 LD・Dyslexia センターに来所し、読み書きのトレーニングを受けている、もしくは受けていた児童生徒 100 名程度を対象とします。

音読速度課題として、ひらがな単語、カタカナ単語、ひらがな非語、カタカナ非語、文章の5試行のデータを使用します。認知機能については、標準抽象語理解力検査（SCTAW）、図形模写、図形直後再生、図形遅延再生、RAN（Rapid Automatized naming）、非語復唱、単語逆唱課題のデータを使用します。

3. 研究期間

「目白大学における人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会」承認後～2020年3月31日までとします。

4. 予想される成果

発達性ディスレクシア児における音読速度の発達、発達性ディスレクシア児の音読速度に関わる要素的な認知機能、今後の指導についての示唆が得られると考えます。

5. 研究組織と経費

研究者は目白大学 春原則子です。経費は目白大学基本研究費とします。

6. 倫理的配慮

目白大学において、人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会の承認を得て実施いたします。

以下について、来所中の来所中の対象者と対象者が未成人の場合は保護者に対しても口頭および書面、参加の意思が確認された場合に実施します。過去の来所者および保護者に対してはNPO法人LD・Dyslexiaセンターのホームページで伝え、ホームページに掲載された不承諾書あるいは電話、メール等による不参加の意思が確認されない場合に実施します。

通常の評価で行っている課題のデータを使用するため、肉体的、精神的負担はないこと。参加は自由であり、途中でいつでも中止できること、参加しないことによって一切の不利益を被らないこと。終了後もデータの破棄の要望に応じること。データは匿名化して取り扱い、研究者以外にアクセスできない春原研究室内の鍵のかかる場所に保管すること。データは公表前に、紙は細断、デジタル媒体は復元不能な状態で廃棄すること。

7. 利益相反

研究実施にあたり、利益相反はありません。

8. 研究結果の公表の方法

研究終了後1年以内に関係誌に投稿予定とします。

9. 引用文献

- Barca L, Burani C, Filippo GD, & Zoccolotti P (2006) Italian developmental dyslexic and proficient readers: Where are the differences? *Brain and Language*, 98, 347-351.
- Marinelli CV, Angelelli P, Notarnicola A, & Luzzatti C (2009) Do Italian Dyslexic children use the lexical reading route efficiently? An orthographic judgment task. *Reading and Writing*, 22, 333-351.
- Speece DL, Ritchy KD (2005) A Longitudinal Study of the Development of Oral Reading Fluency in Young Children At Risk for Reading Failure. *Journal of Learning Disabilities*, 38, 387-399.
- Tressoldi PE, Stella G, & Faggella M (2001) The Development of Reading Speed in Italians with Dyslexia: A Longitudinal Study. *Journal of Learning Disabilities*, 34, 414-417.
- Uno A, Wydell TN, Haruhara N, Kaneko M, & Shinya N (2009) Relationship between Reading/Writing Skills and Cognitive Abilities among Japanese Primary-School Children: Normal Readers versus Poor Readers (dyslexics). *Reading and Writing*, 22, 755-789.
- Wydell TN, Butterworth B (1999) A case study of an English-Japanese bilingual with monolingual dyslexia. *Cognition*, 70, 237-305.

10. 不同意の場合

添付の不承諾書のメールでの送信、もしくは電話、e-mailのいずれかの手段にて、11 月 30 日までに同意されない旨をお知らせいただけますようお願いいたします。

連絡先

目白大学保健医療学部言語聴覚学科
教授 春原則子

〒339-8501 埼玉県さいたま市岩槻区浮谷320
目白大学保健医療学部言語聴覚学科
TEL : 048-797-2131
e-mail : haruhara@mejiro.ac.jp